



長期留学体験談（フランス語圏）

2023年度 リヨン・カトリック大学（フランス）

M.K.(心理学科 2023(R5)年度留学)

今回の留学を通して、語学力の向上だけでなく、自分の価値観や考え方が普遍的でないという事に改めて気づかされました。

留学する前は、人との違いを認めることはできても理解しようとするのが難しかったり、露骨に興味を失ったりしました。しかし、語学学校にはフランス人だけでなくスペイン人、イラン人、アメリカ人、ブラジル人などなど様々なバックグラウンドを持つ人がたくさんいました。互いに感じ方が違うため、授業への向き合い方やランチタイム中の時間の使い方一つとっても大きな違いがたくさんありました。そのような中で、自分の考え方が全てではないということに改めて気づくことができ、多文化共生することの面白さを体感することができました。また、現地で出会った同じ世代のフランス人の友人ができたのは、とても嬉しいことでした。フランス語で星の王子様と一緒に読んだことがあり、その時は全く違う視点から見た感想を聞くことができ、作品の奥深さをより感じることができました。ホストマザーとの生活では、同居はしていないけれど家族が多くいたということもあって、フランスの日常やホームパーティーの雰囲気などを感じることができました。

今回の留学経験は、難題に直面した時に一つの多様な可能性やソリューションがあるということを感じさせてくれました。今後、それぞれのライフステージで直面する課題と向き合ったときに、「これしかない。/仕方ないから我慢する。」という考え方に縛られるのではなく、広い視野をもって考えることができればと思います。



2022年度 モントリオール大学（カナダ）

R.N.(英語文化コミュニケーション学科 2022(R4)年度留学)

仏語だけでなく、英語で講義を受けることができる大学を探していたところ、モントリオール大学に出会いました。モントリオールでは仏語を公用語としているため、第二言語として英語の授業を受ける学生もいるため、様々なバックグラウンドを持つ人々と交流できる点や、所属学科が英語を扱うため、英語による文化や文学の講義を受けると単位認定がスムーズに行いやすいという利点に魅力を感じました。

モントリオール大学では、予習だけで3～4本の文献を読むことは当たり前であり、課題として出されるレポートでも多くの本を読んでから執筆に取り組みました。多くの時間を文献を読むことに充てることで、より良いエッセイが完成し、また達成感も得られます。時には、読むことに疲れてしまい、友人と遊んだりしましたが、この読書が今後の私の人生でも活かされると思い、ひたむきに取り組みました。

生活面では、住居などの手続きや家事、友人との時間など自身で管理して生活をしないと、すぐにだらけてしまうと感じ、常に予定を書き出すなどやるべきことを怠らないように気をつけて生活をしました。短い期間ではありますが、友人にも恵まれ、多くの同じ志を持つ留学生の友人や現地で生活をしている友人と作ることができました。友人との会話では今後のやりたいことなどを話し合い、留学経験を活かして何をしたいか深く考える良い機会でした。

2022年度 ラバル大学（カナダ）

K.T.(国際交流学科 2022(R4)年度留学)

2020年、私は聖心女子大学に入学しました。そのため、コロナの影響を大きく受け、大学2年生まで想像していた学生生活とはかけ離れた生活を送っていました。今振り返ってみると、この留学は私にとって、大学で学び続けるためのモチベーションであり、大学に在籍する間にコロナ前と同じような大学生活を送ることができたら良いなという夢を実現させる意味を持っていたと思います。

留学を決心した当初は、コロナの影響で留学に行けるかわからないという状況でしたが、留学先から許可証をもらってからは、ビザの申請に時間を要したため、本当に行くことができるのか直前になるまでわかりませんでした。8月上旬ようやく留学に行くための準備が完了しました。余裕のない状況で始まった留学でしたが、留学前も留学中も私をサポートしてくれた方々のおかげで、ケベックでの生活を楽しみながら帰国することができました。

ラバル大学で授業が始まってからは、一コマ3時間という授業時間やケベック訛りのフランス語に慣れるのに時間を要しました。生活面に関しては、外食をするとかなりの出費になるため自炊を頑張っていました。限られた食材で日本の料理を作ることがいつしか私の趣味になり、食を通して他の国出身の友人たちと交流をして楽しんでいました。この経験を通して、自分の好きなこと、自分の趣味を通じて交流することの楽しさに気がついたり、文化のもつ力を実感したりしました。今までは、日本の外にばかり目を向けていましたが、日本の良さを再発見し、正しく発信するための正しい知識を身につける必要性を感じました。

私は、ラバル大学に派遣された一人目の学生であるため、この大学に興味を持った学生に情報発信をして生かしたいと考えています。



2020年度 リヨン・カトリック大学（フランス）

R.T.(国際交流学科 2020(R2)年度留学)

友人と遊びに行ったり、たくさん旅行をしたりする中でフランスやヨーロッパの歴史に触れる、、、私が想像していた留学生活は送れませんでした。しかしコロナ禍での留学に価値がなかったかということそうではなく、別の価値があったと思います。

学習面では後期(2-5月)の最初の1ヶ月は普通の授業で、途中から全てオンラインに変わりました。私は文法より会話や聞き取りが苦手なため、この授業形態の変化のショックは大きかったです。しかしテレビ電話によって、よりわかりやすく発音したり聞き取るときの想像力が鍛えられたりしたのではないかと思います。前期(10-1月)も同じく最初の1ヶ月が対面授業で、第二波が来たことによりオンラインと対面の隔週になりました。大学側が前回の反省を生かして政府に抗議したからです。そのおかげで友人とも仲良くなり、クラスの雰囲気も良かったです。

生活面では、コロナウイルス第一波で全国の学校が休校・商業施設の休業、そして外出禁止令が下されました。しかし時間ができたことで、将来について真剣に考えるようになりました。自分自身、何も定まっていないことに気づき、留学を通して一年間親元を離れて生きること何か発見できればいいなど、留学を継続することを決意しました。そしてこの一年を通して、いろいろな人や価値観に触れて、自分がいかに狭い視野で生きてきたのかを痛感させられました。なぜ留学をすると価値観が変わるなどと言われるのか自分なりに考えた結果なのですが、結局人間は現状維持を望みます。すると自然と同じような人と集まり、環境が変わらないようにします。留学をすると、同じ日本人でも違うタイプの人に出会ったり、そしてもちろん違う国・年齢の人にいわば強制的に会うことができたり、その人たちの考え方を初めて知ります。留学する前は漠然と刺激を受けたいと言っていましたが、まさにその目標を達成できました。

今回の留学になんの不満もないと言えば嘘になりますが、むしろまた来たいとすら思っています。終わってみれば一年でも物足りなく感じるのも、半年と一年で迷っている方は是非一年を検討してみてください。



2019年度 モントリオール大学（カナダ）

N.H.(国際交流学科 2019(R元)年度留学)

私は高校生のころから漠然と海外留学に憧れがあり、大学進学後に自分の可能性を広げられることに挑戦したいと思うようになりました。そこで、留学が適していると考え、国際センターが開催している説明会や帰国報告会に足を運び、沢山の情報を得ることから始めました。私は長期の交換留学を

希望し、選んだ留学先はカナダのモントリオール大学です。協定を結んだばかりで、留学の前例者がおらず、情報がほとんどないところから始まりました。今思えば、留学中も大変でしたが、留学前の準備早々から心が挫けそうになったこともあります。

モントリオールの街は、カナダ国内でも大きな都市の一つで移民の受け入れ数も多く、町並みはヨーロッパっぽい雰囲気を持ちながら、多様な人種と文化に溢れていました。モントリオール大学は非常に大きな大学で生徒数も多く、初日から圧倒されたのをよく覚えています。一コマ 3 時間の授業を週に 4 ~5 つ取り、課題もかなり多かったです。友人や大学のサポートで見つけた言語パートナーに協力を得ながら進めることができました。大学の授業ももちろん大切ですが、私は交流の場を広げることに力を入れ、友人以外にも、現地の青年団体に所属することもしました。そして冬が長いモントリオールで飽きるぐらいの雪遊びや、ホストファミリーとの時間、犬の散歩、団体のイベントに参加し、忙しすぎるぐらいに過ごしていました。私はもともと、大勢でいるのが好きではないので、寮やシェアハウスはあまり視野に入れず、しかし 1 人暮らしも心細くなりそうだったので、ホームステイに決め、結果的に家族やペットと有意義な時間を過ごせました。

今回の COVID-19 により、2 か月程早く帰国しましたが、最終的にオンライン授業で学期末まで授業を受けることができました。イレギュラーなことに振り回されてしまいましたが、自分が望んでいた自身の可能性は大いに広がり、成長できた部分が多くあると思います。これから留学を考えている方には、ぜひ応援したい気持ちと並行して厳しいようですが、留学準備から留学という長い時間を過ごしぬけられる覚悟をもって欲しいという気持ちもあります。しかし、留学中は本当に新鮮なことであり、吸収する毎日で楽しい事がたくさんあります。大いに希望を持って前向きに頑張ってください！

2019 年度 リヨン・カトリック大学 (フランス)

M.I.(国際交流学科 2019(R 元)年度留学)

古くからヨーロッパの発展に重要な役割を果たした歴史のあるリヨンで、留学生活を送ることができたのはとても貴重な経験でした。語学力の向上を主な目的としながらも、フランスの歴史や文化の学びも深めることができ、同時に卒業論文を視野に入れながらテーマ探しやフィールドワークも行うことができました。

帰国までの DELF B2 取得と DALF C1 の受験を目標とし、継続することを意識しながら勉強に励みました。最終的には無事目標を達成することができましたが、振り返ると初めの三ヶ月に苦戦したことが印象に残っています。複雑な文法や単語の多さから改めてフランス語の難しさに直面しました。実際に話されるフランス語と学校でのフランス語ではスピードや会話が異なるので、学校外で話をする環境作りをしていました。毎日課題があり、授業内容も多かったので授業後には友人と図書館で勉強をしていました。次第に慣れ、夏には集中講座を受けながら勉強を続けていましたが、後期に入りクラスが変わるとリスニングや読解の点数が伸び悩みました。一年の中でこのような波が何度ありましたが、その都度先生などにも相談しながら乗り越えることができました。

生活面においては、二年生の夏にパリでの短期留学を経験していたため問題なく留学生活を始めることができました。フランスには美しい景観や農業国ならではの食の豊かさが身近にあり、またエレベーターで乗り合わせた人との挨拶や、顔なじみの市場やお店ができた時に自然とコミュニケーションが生まれるような日本にはない人との距離感の近さを感じることができます。反面、週末のデモやストライキ、郊外と中心部の社会格差などを頻繁に目の当たりにします。これまで報道でしか知り得なかった事を実際に肌で感じると、その問題について真剣に考えたり、日本の時事にさらに目を向けたりするようになりました。

語学学習はマラソンのようである、と言われますがこの一年で身をもって体感しました。自分自身で伸びを感じやすい時期があれば伸び悩む時期もあり、また長期間自分の計画に沿ってペースを保ち継続することも不可欠でした。また、英語とは発音も文法も異なるフランス語を学びながら文化の全く異なる地フランスで生活することは、それまでの自分の視野の狭さに気がつけた機会であり、日本を客観視できるとても貴重な経験でした。これまでの発見と経験を今後の学びに生かしていきたいです。

